
不良魔法拳士の傭兵稼業

はく@ねる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不良魔法拳士の傭兵稼業

【Nコード】

N00280

【作者名】

はく@ねる

【あらすじ】

黒澤影久くろさわ かげひさ（18）は喧嘩の毎日を過ごしていた。普通に過ごしていても喧嘩を売られてダルいの思っていたある日、眼がさめたら知らない森の中にその世界では魔法やモンスターが普通にいて？影久は一体どうやって過ごしていくのか・・・

不良異世界へ

「ここは・・・どこだ？」

辺りを見回しても一面 木・木・木たぶん何処かの森なのだろうが
俺は森なんぞに来た覚えはない
俺は手ごろな切り株を見つけるとそこに腰をおろし
タバコに火を付け吸い始める

「・・・ふう、一体ここは何処だ？」

タバコを吸いながら起きる前のことを思い出す

といっても普段と変わらない日常を過ごしているだけ
普通の人と違うところと言えば毎日のように喧嘩をしていることぐ
らいだ

後は普通に家のベッドで寝ていて起きたら森の中

「まったくもって意味がわからん」

こんなとこにずっと居ても埒が明かない
そう思ってたどりあえず森の中を散策しようと歩き出そうとしたとき
何かがこちらにくるような音が聞こえた
人だろうか？

そう思った矢先にそんな幻想は砕かれた
犬だったのだそれも大型犬よりも2周りはでかい
唸りを上げながらその犬はこちらに口を開け噛みつくことと飛びかか
ってきた

「こんな意味も分からんとこで犬に飛びかかれるとはな」

そついうと隙だらけの顎にアッパーを打ちこむ

犬がその衝撃で動けないところをすかさずに

回し蹴りを放つとかかとの部分が上手く首に当たったのだろう

ゴキツという鈍い音とともにそのまま犬はこと切れたように崩れ落ちた

犬が死んだことを確認すると落ち着く様に新しいタバコを取り出し
また吸い始める

そして適当に森の中を彷徨い始めた

特に長い間彷徨ったわけでもなく

時間にして2、30分だろうか？それくらいで森を抜けだすと近くの町についた

特に凄いとこなんてない

よくファンタジーなのである田舎町なのだろう建物が全て木でできている

ただこれだけなら良いのだが町を歩いてる人の中に

鎧を着て剣を背負ったり腰に下げてたりする人がいるのだ

これで俺はファンタジーな世界に来ているのだと実感した

不良異世界へ（後書き）

どうも作者です

戦闘描写が難しいといろいろなところで聞きますが

本当に難しい

思考錯誤しながら頑張っていますので
生温かな目でみていてください・・・

ギルド登録

町を歩いてると剣のマークを掲げた店があった
たぶん武器屋なのだろうと思ひ店の中に入っていく

中には様々な武器があった

剣や槍、斧、メイス、弓など他にも種類が細かく分かれているのだ
ろう

だがこの金の価値も分からない上にないので見送り店を出た
店を出ると目の前にあったのが盾のマークの防具屋だ

そのまま防具屋に入っていく

防具屋には鎧や盾などが大雑把にいろいろあった

籠手や足当てなどもいろいろあったが違いがわからなかった

こちらも武器屋と同じ理由で後にした

「まったく本当にファンタジーな世界だな」

そう愚痴つてると目の前に2つの剣が重なってる看板が見える
さっきの武器屋と違うのだろうか？

そう思いながら中に入ると急に活気がよくなった否、騒がしくなった
少し中を見回すと10人ほど冒険者と思われる人たちがいる

他には掲示板に様々な紙が貼られている、たぶん依頼書なのだろう
そう思うと受付へと向かっただが冷静を保っていても余裕はなかった
たのだろう

言葉が通じるかなど考えていなかったのだ

「ここに来るのは初めてなのだがここは・・・ギルドで会っている
のか？」

「はい、もしかして冒険者登録の方ですか？」

結果からいえば言葉は通じた

冒険者登録ということは何か必要なのだろうか？

「登録したいのだが何か必要なものとかあるのか？」

「いえ必要なものはありません、ただ紙に同意できましたら登録名を教えてください後はこちらで記入してランクを図りますので」

そういうとこちらに紙を渡してきたが言葉は通じるが文字は読めなかった

読めなかったがとりあえず同意したことにしておく

「わかったそれじゃあクロカゲで宜しく頼む」

「わかりましたクロカゲ様ですね。それでは奥のほうにどうぞ実力のほうを図らせていただきます」

そういうと受付の後ろの扉に通された

因みに遅れたが自己紹介のほうをしておこう

本名は黒澤影久歳くろさわかげひさは18だ

受付の人についていくと一つの部屋についた

その部屋にはすでに一人いた

その姿は雄々しく大剣を背負い一目見て武人という雰囲気を漂わせていた

「俺はランクBのファンゲ「ウルフェイドだ

ここではお前の戦闘の実力を図るそこに武器があるだろう？好きなのを使っていい掛かってこい」

俺の前には剣や槍など多種多様な武器があるが

俺は武器など使ったことがないため素手のまま向かいに立った

「素手でいいのか？」

「武器なんて使ったことなくてね素手のほうがやりやすい」

そういうとファングに走っていく

その勢いのまま思いつきり右腕で殴りに行くが

大剣で防がれてしまう

ファングは防いだ後そのまま横一線になぎ払ってくる

俺はそれを伏せてかわすのと同時に回し蹴りを放つが
後ろに避けられ空を切るだけだった

「反応は早いようだが・・・まだ甘いな」

そういうといつの間に来ていたのか視界の下から大剣が迫ってきて
いたので

とっさに腕で防ぐが吹き飛ばされる

「ちっ・・・化け物かよおっさん」

「まだおっさんと言われる歳じゃない・・・もうギブアップか？」

「ぬかせ・・・まだこんなもんじゃ終わらないぜ！」

そういつてまた駆け抜けていき殴りかかる

「ふん馬鹿の一つ覚えか」

ファングがそういつて大剣で迎え撃とうと切り下ろすが
目の前から迫っていたクロカゲはすでに前にはいなかった

「はんっ甘いんだよ！」

ファングが声をしたほう、上に視線を移すと

すでにクロカゲの蹴りが迫っていたが

振り下ろした直後なので対応することができずそのまま食らってしまった

「グッ・・・だがまだぬるいな」

着地した直後のクロカゲの腹をファングの大剣が襲うが

それは後ろに避けられてしまう

その後も2人の戦いは続いたがクロカゲの攻撃が2度と当たること
はなかった

ギルド登録（後書き）

だめだ戦闘描写難しすぎてやばい

感想とかあつたら教えてください

こついう風に進めたら？ってあつたらぜひ教えてください

ギルド登録完了

フアングとの戦闘が終わった後
俺は違う部屋につられてこられた
どうやらここでは魔力の適性を見るようだ

「それではまずこの水晶に魔力を込めてください」
「いや・・・込めてくださいとか言われてもやり方知らないんだが・・・」

「そうですか？こんな感じに体の中から練り上げて放出する感じにやるんです」

受付の人がやるとともに透明だった水晶が青に変化した
ちなみに後で聞いたところ受付の人の名前はリーナさんというらしい

「それではやってみてください」

リーナさんがほほ笑みながら俺に渡してくる
だがすぐにできるわけはなく何度か試した後ようやく水晶の色が変化した

「水色・・・だな」

「水色ということは水術と風術に適性があるんですねー」

「2つも適性があるのか・・・それは普通なのか？」

「一般的には一人1つですけど絶対できないわけじゃないですしギルドの上位の人は3つとかいますね」

2つというのはビックリしたがやはり適性は適性なのだろう
その2つは覚えやすいってことか

魔法についてもいろいろ教えてもらった

まずは、第一段階の火術 水術 風術 土術これは練習すれば誰でも出来るらしい

ただ上級の技ができるのは、やはり適性がある人だけとか

次に、第二段階これは第一段階の複合だとかで

火術＋水術Ⅱ爆術 水術＋風術Ⅱ氷術 風術＋土術Ⅱ雷術 土術＋火術Ⅱ溶術

爆術は爆発 氷術は氷化 雷術は、まあ雷を起こしたり そして溶術これはマグマみたいなものらしい

最後に第三段階というより特殊段階 光術と闇術だ

この2つは第一段階をすべて使えるらしい反則だな
だが光術を使えるのは今まで勇者しかいないらしく
闇術を使える人も歴史で数えるくらいしかないらしい

「それでクロカゲさんの魔力量ですがBクラスですね」

「それはどれくらいいいんだ？」

「そうですねー普通の人でDクラスなので倍くらいですかね？」

とりあえず一般の人より多いのだろうそれでもごろごろいるレベルらしいが

ということは魔法に関しては普通の人よりも得意程度ってことか

「これでとりあえず登録のほうは終わりになります

クロカゲさんはDランクからの開始にさせていただきますね」

傭兵のランクはFⅡSSSまでであるらしい簡単な説明をすると

F：駆け出し

E：魔物（下級）を一对一で倒せる

D：魔物（下級）を一体集団で倒せる 魔物（中級）を数人对一で倒せる

C：魔物（中級）を一对で倒せる　魔物（上級）を数人对一で倒せる

B：魔物（上級）を一对で倒せる

A：魔物（上級）を一对集団で倒せる

S：龍種を倒せる

SS：龍種を一对で倒せる

SSS：一人で国を相手にできる

こんな感じらしい実際にSSSなんていたことはないらしいがSSは数人いたらしい

とりあえずこれで傭兵として動けるようにはなった

まずは依頼をこなして金をためて装備を整えないとな・・・

魔術の練習もしないといけないし

ギルド登録完了（後書き）

どうも作者です

書き溜めなんてないです
気がついたら書いてましたw

こんなキャラを出したいなどありましたら
よかったです言ってください
できれば答えます（むしろ考える手間がはぶけ
t

初めての依頼

とりあえず受付で何かいいのがないか依頼を見ています

1つ、眼に止まるものがあつた

内容はDランクとしては普通か少し難しい程度だろう

ウルフと呼ばれる犬型の魔物の集団を退治してほしいというものである

*（ちなみにウルフとはこの世界に来て最初に戦った魔物のことである）

ここまでなら普通の依頼なのだろうが

他の依頼が銅貨50 70枚というのに対して

この依頼は銀1枚銅50枚という倍近いのだ。（金貨＝銀貨100枚 銀貨＝銅貨100枚 銅貨＝日本で言う100円相当）

普通ならばこんな依頼受けないだろう危険な匂いしからぬからである

だが今のクロカゲは金がまったくないのである

「それじゃこの依頼受けさせてもらつていいな？」

「了解しました気をつけてくださいね」

この依頼の説明のときにある程度ウルフのことを教えてもらった

一般的に集団の場合はそれを率いる一回り大きい角のついたリーダー格がいること

基本的に集団は10 15体前後であるということ

リーダー格を倒した証に角を持つてきてくれれば依頼達成ということ
牙は使い道があるのでとつてきてもらえば買い取ることなど色々である

ウルフが出るといふ場所には歩いて1時間ほどの場所であるらしく

ゆっくり行くことにした

ここで少し今の俺の格好を確認してみる
金髪にピアス タバコも今は吸ってる
服装はブレザー服

もちろん剣などではなく殺傷力があるのは安全靴のように
鉄板を仕込んである運動靴くらいなものだろう

もちろんこれだけでは苦戦することは分かっているため
道中魔法の練習を少しすることにした

といってもどういう魔法があるかも分からないため
検査のときのように魔力を放出する感じをつかむ程度だが
目的地に着いたところには魔力の放出は確実にできるようになった
それで分かったことが1つだけある

それはゲームのような魔法では全然違うということである
まず長つたらしい詠唱などはないのである

放出した魔法を槍の形に想像したとする、それだけで魔力の槍はで
きるのだ

そこから魔力の属性を変換することで魔法となる
いかに複雑な魔法を使えるかは、いかに効率よく変換できるかにな
ってくるのだ

ただ俺が覚えたのは魔力の槍に属性を風に変える『エアランス』
だけだったが・・・

目的地に着いたことでウルフの集団を探し始めたのだが
目的の集団はすぐに見つかった
それもそのはずだ

「おいおい・・・聞いてた話と違うぞ・・・」

その集団は40匹は超えるだろう大世帯の上に
角のついているリーダー格が3匹もいたのだ

俺はエアールランスを5つ周りに作ると一気に放つ

それはこちらに気づいてないウルフに当たると3匹ほど吹き飛ばす
やはり気づいたのだろうリーダー格の一匹がなにやら指示を出す
と10匹ほどのウルフがこちらに突っ込んでくる

俺はエアールランスを10本作ると向かってくるウルフに1本ずつ放
った

初めての依頼（後書き）

どうも作者です

台詞が少ないのがあれですよね・・・
もっとなんばります・・・

ウルフたちの戦闘

俺がそれぞれ放ったエアランスは

10匹のウルフたちをひるませる事に成功した
ひるんだウルフにそのまま追い討ちをかけ絶命に追い込む

「グルル・・・ガウツ!!」

最初に吠えた角付きの隣の2匹が吠えたと
残っていたウルフたちが一斉に襲ってきた
その数は実に30匹ほど

「つたく・・・めんどくせえな」

エアランスを10本創り適当に放つ
放ったエアランスはウルフたちの足や顔に当たり
転ばせひるませる事に成功する、ついでに目の前で急にひるんだやつに

ぶつかったりするやつも出た

それでも10匹ほどが一直線に突っ込んでくる

その中でも、としゅつして突っ込んでくる1匹にかかと落としを打ち込み絶命させる

他の突っ込んできたウルフたちが爪や牙で攻撃してくるが
紙一重でそれをかわすと出遅れたウルフたちが迫ってくるのが見えた
前には20匹ほど後ろには10匹ほどに囲まれてしまった

「こりゃー絶体絶命ってやつか？」

そうつぶやくと同時に囲んでいたウルフたちが突っ込んでくる

反撃しようと思構えるがそれは無駄に終わる

ドドドドドドッ

空から急に無数の矢が現れ囲んでいたウルフたちを一掃してしまったのだ

「大丈夫だったかい？」

声のした方向に振り向くと一人の男が近づいてくるのが見えたその男にはある特徴があった耳が長く尖っていたのだ

（ファンタジーな世界でい『エルフ』ってやつか？）

「ああ・・・だがまだ終わっちゃいないがな」

角突きたちがいたほうをみると角突きたちがこちらに向かってくるのが見えた

「あいつらでようやく終わりさ」

俺はエアールランスを9本創るとそれぞれに3本づつ放った

ウルフたちの戦闘（後書き）

遅くなって大変申し訳ございません作者です

大学の学園祭の準備や本番が忙しかったせいで
考える時間がなかったです・・・；ω；

それと魔法の作るを創るにしようとして書いてるときに思っ
て急遽変更
創るのがあつたるよね！たぶん

ネタの提供どなたかよろしく願いします><；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0028o/>

不良魔法拳士の傭兵稼業

2011年10月6日18時04分発行